

『半窓の淡月』と戦中の歌

大野道夫

佐佐木由幾の第一歌集『半窓の淡月』は一九八九年、由幾が七四歳の時に出版された。一九三七年の佐佐木治綱との結婚を契機に作歌をはじめ、すでに歌人として半世紀以上のキャリアを持った、ある意味では遅すぎた歌集であった。

- ・ 思ひ切り夏を伸びたる珊瑚樹の切られて
午後風の風ややつよし
 - ・ わが家まで駅より坂の無きことに夜更け
掘り坂を踏みまし
 - ・ 細き蛇に生きよ生きよ言ひきかす生きて
年々このみどり見よ
 - ・ しなやかに野を跳ぶ豹も見ず終るわれの
一生か多摩川の辺に
 - ・ 水満てる大き壺ある一隅をひき緊めいま
だ夕光ただよふ
 - ・ 逝く秋の夜長の独り菊の香に誘はれて舞
ふひとりの舞を
- 『半窓の淡月』の出版記念会で森岡貞香が「一つの気品といっしょに歌われている」

と発言しているように、緊張感ある言葉のなかに凛とした気品を感じさせる歌が多い。たとえば「思ひ切り」、切られて、「つよし」などの言葉によって詠まれた一首目もそうである。また二首目は、どこから「駅」を経て「わが家」まで帰ってきた「夜更け」のことなのだろうか、三句目までのようなことに「掘り」、結句「坂を踏みまし」と詠んでいるところに作者の強い意志を読むことができる。

また作者は蛇が好きだそうだが、「インタビュー」「心の花」一一〇年記念号、二〇〇八年六月号）、三首目の「細き蛇」という命への呼びかけが、強く、切ない。また「生き」を中心に、「細き」、「きかす」なども含めた「き」、「言ひ」を含め「い」、そして「年々」、「みどり見よ」の「み」などのリフレインが効果的である。そして四首目の「しなやかに野を跳ぶ豹」をうたった歌も、ほのかなエロチシズム

と、「見ず終る」寂しさとともに気品を感じさせる。五首目は前後の歌からすると自分の家の中のようなのだが、昔の家のような空間がうたわれ、「ひき緊め」が文字通り歌をひき緊めている。

また夫の治綱が五〇歳で急逝し、その後主宰として「心の花」を背負っていったためか、由幾の歌には孤独を感じさせる歌が多くある。六首目は「独（ひと）り」が二回詠み込まれ、「菊の香に誘はれて」に気品がただよう。また治綱は十月の幸綱の誕生日に亡くなったので、「逝く秋の夜長の独り」には、治綱が亡くなったことも詠み込まれているのかもしれない。

なお「心の花」を背負って歌の道歩んでいくことについて由幾はさまざまな場で語っているが、一九六三年に信綱も亡くなったあとの、ちょうど半世紀前の六五年六月の「心の花」八〇〇号では、次のように語っている。